

うせみんなエゴなんやし」

弘章が両手に持つピザの一方を口に放り込む。

「ヒロ、ちょっと待てや。エゴでええなんて言うたら、何でもありやん」

ごくりと飲み込み、弘章が続ける。

「何でもありちゃうわ。まず自分も人も、命は大事。オッケー？」

胡散臭く思いながら、美海が不機嫌そうに頷く。

「そのうえで、みんなそれぞれの幸せは違うんやから、それは侵したらあかん。つまりさ、人や何かを傷つけることが自分の幸せいうんは駄目や。矛盾があったら駄目やということやないか。命だけを守っても、幸せだけを守ってもあかん。両方が守られることが大事なんやと思うわ」

弘章の言葉に、美海の思考が混沌とする。

「じゃあなに、命だけが守られても、幸せじゃなければ駄目だってこと？」

渚が問う。

「逆に、幸せが感じられても、命が守られんかったらあかんということ？」

美海も問う。

「そう。そういうこと」

「何か、私ら騙されとらん？」

「ないない！ほやから、敦士は敦士でええんや。渚さんは渚さんでええし。美海は美海でええし、俺は俺でええんや。みんながみんな、そのままでええんや」

さらに美海が問う。

「否定はいかん？」

「否定はええ。命や幸せを侵さない程度になら。そしたらみんな、言いたいことが言えるやろ」

「つまり、他人の命や幸せを侵さない、自分の命や幸せも侵されないってこと？」

渚がまとめに入る。

「まあ、そういうことです」

「何か、ヒロに言われてもなー」

「騙されてる感じ」

敦士も美海も懔然とする。

「何や、それ」

そんな三人を見て、渚が小さく笑う。くるくると巻いたパスタを口に入れる。

島の頂、檀山に登る。標高三〇〇メートル越え。この規模の島には異様な高さ。

砂利道の手前で自転車を置き、あとは歩く。日の光を遮ることのない夏の登山はさすがに堪える。もう駄目、と泣きを入れる美海に、高校生が何言ってんの、と渚が励ます。そんな二人を尻目に、敦士と弘章が馬鹿騒ぎしながら競うように走っていく。

「なに小学生みたいなことやってんのよー、ちょっと待ってよー」

三六〇度、遮るものが何も無い、てっぺん。南は四国山地から、東は淡路島、北は中国山地、西は瀬戸大橋までが一望できる。その手前には、大小いくつもの島々が浮かぶ瀬戸内の海。多島海だ。

「これは気持ちいいわ」

「冬の天気さええ日には、大山が見えることもあるんやて」

「すごいねー、日本海から太平洋まで。なんか、見えるすべてを手に入れたみたい」

スマホ上のマップでは感じられないリアル感に圧倒される。暑さよりも、雄大な景色の爽快さが勝る。

「ここで夜、星を見てみたい」

遮ることのない夜空に満天の星。遠くに瞬く夜景。橋の点滅。瀬戸内の海を滑りゆく船の光跡。夜空を流れゆく夜間飛行や人工衛星の光跡。想像しても、想像しきれない。

イノシシ出ますよ、と言う敦士を見て渚は、展望台の上は？と食いさがる。

蚊も出ます、と追い打ちをかける言葉に、いやらしいなー、とふくれる。

「そこまでして見たいんー」

「だって、そんな絶景見られないよ」

そうなのかなー、と怪訝な表情をする三人の胸のなかに、小さく灯る輝きを感じる。

「敦士くん、形あるものは壊れて消えてなくなるって言ってたじゃない。あれからずっと考えてたんだけど、私はちょっと違う気がするの」

まだ観光地化されていない、手つかずの自然な砂浜を前に四人が座る。島の原風景だ。同じリズムで押し寄せる波音に渚の声が重なる。

「消えてなくなるなら、この島のゴミもどこかに消えてなくなってるわけじゃない。

でも、違うよね。処理されて、再利用されてるよね。形あるものは、消えてなくなるんじゃないくて、形を変えて生き続けるんだと思うの。水が蒸発して、霧になって、気体になって。それが冷えて雪とか氷になって。それが解けてまた水に戻っていくみたいに」

沈思したあと、敦士が応える。

「渚さん、ダークマターいうて知っとる？」

何それ？と美海が反応する。

「宇宙空間に質量として存在しとるはずなんやけど、見えん物質」

「見えないのに存在するの？」

「何それ」

美海も弘章も食いつきはするが、釈然としない。

「理論上あると考えると成り立たんのやけど。あるから、この宇宙が成立しとる」

「へー、ほんでそのダーク何とかが、なんなん」

「見えんけど存在するいうたら、形が壊れたり消えてなしなっても、見えんだけでそこに存在しとるいうんと似とるなと思て」

敦士の一人語りに、一ヶ月前のとげとげしさがなくなっていた。それを感じ取ってか、他の三人にも自然に染み込んできた。

「おじいちゃんやお父さんたち死んでしもたけど、形を変えて今、俺たちの中で生きとんかなって思て」

ポッと美海の胸が熱くなる。込み上げてきた思いを口にしようとするが、その前に涙がこぼれ落ちそうになる。堪えて告げる。

「なんか、あっくん、変わったね」

「そうかなあ」

惚けているのか、照れているのか、本当に分かってないのかはよく分からなかった。

熱くなったのは、きょうだいのように生まれ育ってきた弘章も同じだった。

「うん、ええ意味で変わった」

そんな素直な三人の姿に、渚の胸も熱くなる。

「俺はここに残る。残って、植村のおじさんと漁師をする。親父の後を継ぐわ」

「自然科学はやらないの？」

「やるで。そやけど、今の時代、どこにおったってネットさえあったらいくらでも学

べるやん」

それは、学校や学歴という価値観や尺度を否定するのではなく、それに対する抵抗や反発でもなかった。ただ純粹に、「興味のあることを学ぶ」という自然な姿に見られた。

「そっか」

「漁師しながら、自分の思うように学んでみるわ。美海の言う地球環境やら自然破壊を、最前線のこの海で、この眼で見続けていこうと思う」

「なんやねんな敦士、格好ええやん」

「なんかあっくんが一番地に足が着いてる感じやな」

確かに、と吹き出すような渚の笑いが、他の三人にも伝染する。

「ヒロはどうするん」

「俺は、やっぱ東京行くわ。行って全国に仲間つくって、いろんな所を見てまわる」

「そっか」

島を離れる残念な気持ちは残るものの、どうしようもないことだということも、みんな承知のうえだ。

「いいんじゃない、島に留まるより」と歓迎し、応援しようとする美海の言葉に、弘章が返す。

「ううん、ほんでな、卒業したら島に帰ってくるわ。そんで、民宿経営する」

「えええー！なにそれ！」

意外な展開に、一同の視線が集まる。

「格好よくね？都会帰りの民宿経営って」

その言い草が弘章らしく、美海がいつものように反発をする。

「それいうて結局、都会を地方に持ち込んできただけとちゃうん」

「そうかもしれんけど、敦士が言うたようにネット環境があつたら、都会におらんでもいろんなことができるやん。だいたいこんな長閑なところで生きとった俺らがな、あんなせこせこした都会に馴染めると思うか？」

いい加減なキャラで通ってきた弘章が、最近は真っ当なことを言うことが多くなり、美海も敦士も調子が狂う。

「それにあんなとこは、たまにでええんや」

「なんか、もう都会人みたいなこと言いよる」